

9  
和  
二  
段

百年前の書物の直段

藤井紫野

名古屋の永樂屋東四郎といへば堂親を東壁堂と称して、三府以外の出版書肆として雄名を擅にしたものがあるが、明治の末年頃業を轉廃して今日はどうなつたか一向聞く所が故心。

私が名古屋に勤中へ手に入れた同家の蔵版定價録は九行罪紙三十枚から成り、東壁堂蔵版目録と表紙に記し、末に文政五年壬午季秋改とあつて、多数の書目と直段を掲げてある。之を見ても今日ではあまり價のせぬ和漢書が却て高價で、同家の待色であつた畫譜類は今日と較べて非常に安直である。群書治要 四拾七冊合本廿五冊 全

巻兩卷分式朱が最高のもので、北齋漫画は各篇ともすべて二枚八分、福善齋画譜五冊が箱入で拾枚八分、無箱で九枚五分とある。王に比べると本居物の地名字音轉用例一

冊式枚、葛花二冊六枚八分などは非常な高價であるといはねばならぬ。鬼子に此時代でも眞面目な著述は發行が少なく、娯樂的の画譜類とはおのづから採算を異にしたのであらう。今<sup>初筆</sup>和書<sup>部</sup>から俳書<sup>部</sup>まで原本七枚分を掲げて参考<sup>に</sup>供へよう。

15

10

5

10

15

20

24